

# 戦時下における食生活

——中国・四国地区在住高齢者の聞き取りによる——

The Dietal Habits and Science during World War II :  
Interviewing Aging People in the Chugoku-Shikoku District

(1995年3月31日受理)

菅 淑 江  
Yoshie Suga

Key words : 食生活、戦時下、聞き取り

## はじめに

いままでに「戦時下における食生活」について、おもに婦人雑誌の記事を対象にこの特殊な時期の食生活に対しての指導者、有識者の考え、啓発、実践、対応や調理・献立面からの分析、検討を報告し当時の食生活を本紀要に2報概要したが、今回は一般市民がどのような食生活を営んでいたのか、その実態を把握するため聞き取り調査を行なった。その一端を報告する。

## I 調査方法と調査対象者

〔調査方法〕 平成4年と5年の夏休み期間中。食物栄養専攻1学年の学生による聞き取り法により収集。方法については「生活記録の社会学」<sup>1)</sup>「社会調査ハンドブック」<sup>2)</sup>「社会調査法」<sup>3)</sup>により手法を講義し学習させた。項目は共通のものを設定した。(表1)

〔調査対象者〕 65歳以上の男女を対象とした。集まった資料は男性101名、女性184名の計285名分。この内、条件に合わないもの46名分は却下した。有効利用率は83.9%。今回まとめた調査対象者 男性84名、女性155名、計239名。平均年齢74.1歳 戦時中に外国(戦地を含む)での生活があるもの総計38名の居住地は中国、朝鮮、東南アジアである。(表2・3・4)

表1 調査項目

## ○お話しくださる人に関する記録

- 性別
- 生年
- 満年齢
- 現住所\*
- 子どもの頃を過ごした主たる土地名\*
- 結婚してから過ごした主たる土地名\*
- 昭和19年・20年頃を過ごした土地名\*
- いままでの主たる職業
  - 雇用労働者
  - 自営業
  - 農業従事者
  - 漁業従事者
  - その他

注意：\*印のところは県名と市名または郡名まででよい。

## ○聞く内容

- 昭和19年・20年の食生活を詳しく聞く。
- その他戦争中の食生活を聞く。
- いままでの人生の中で思い出深い食べ物を聞く。  
それにつわる思い出を聞く。
- 子孫に残したい食べ物、食習慣を聞く。  
必ず理由も聞くこと。
- 現在の日本の食生活をどう思っていますか？を聞く。
- 次の項目について聞けるものは聞くこと。  
「子どものころのおやつ」「若いころのお弁当」「兵食」「あなたの雑煮」

表2 調査対象者数と平均年齢

性 別 分 類	男 性		女 性		合 計	総 数
	人 数	平均年齢	人 数	平均年齢	人 数	
いままでのほとんどを中国 地区で居住した者	56名	74.3歳	145名	73.0歳	201名	239名
戦時中に外国(戦地を含む) での生活がある者	28	75.2	10	75.4	38	
そ の 他	17	74.9	29	74.2	46	

表3 現在までの主たる職業

職業分類	男性	女性	計
雇用勤労者	36名	28名	64名
農業従事者	27	70	97
漁業従事者	1	1	2
自営業	12	21	33
その他	8	35	43
合計	84	155	239

表4 調査対象者の現居住地 一県別一

	岡山	広島	鳥取	島根	山口	香川	計
男性	45名	27名	2名	1名	3名	6名	84名
女性	88	35	9	5	3	15	155
計	133	62	11	6	6	21	239

## Ⅱ 結果と考察

### 1 昭和19年、20年頃の食生活

食糧管理法は第2次大戦が始まり食糧難が逼迫した昭和17年（1942）に公布され、供出制と配給制が実施されるようになった。

昭和19年、20年の食糧のなかでもエネルギーの中心となる穀類の需給状態は混乱していた。19年の供給見込み<sup>4</sup>は表5のとおりであった。これが完全に供給されれば国民のエネルギー確保はどうか凌げたのであるが、この需給見通しが現実にとどのような経過をたどったかを示す資料は見当たらない<sup>5</sup>。昭和20年になると米を中心とした食糧統制経済は破綻していた。供出割当に対する供出数量は戦時末期において100%であった。それが20年になると73%に低下している<sup>6</sup>。「小学生の時、となり町で配給があるというのを聞いて、自転車で配給所まで行って並ん

表5 昭和19年度米麦等主要食糧需給見通し

単位：石

需要見込み		供給見込み	
農家保有	2400万	18年度産米	6000万
消費者食糧用	5000万	19年度産米	200万
軍需用	300万	外地米	650万
酒・味噌等用	140万	麦類	550万
空襲等非常用	150万	いも・雑穀類	250万
		満州雑穀類	250万
計	7990万	計	7900万

文献4)より著者作表

でいると、美味しそうな堅パンのいい匂いがしていた。でも3人くらい前で『きょうの配給は終わり』といわれ、いい匂いだったのですごくみじめな思いをした。」(岡山、男65歳) こんな中、平凡な国民はどのような食生活をしていたのであろうか。

調査対象者の大半(40.6%)が農業と関わっていたにも拘らず、飢え、空腹を訴えている。米を生産しても「お上に取り上げられて」(岡山、男66歳、他)雑穀やいも、かぼちゃ等で凌いでいたようである。「自分の家で作っていた米を自分の家で食べるものが無くっても供出させられた。お腹一杯食べては国のためではないと、お腹一杯食べられなかった。」(農業従事者、島根、女65歳)が言っているのが、当時をよく表している。しかし、なかには「保有米が5人で年間7俵あったのでそれほど不自由ではなかった。」(香川、女77歳)という人もいる。これは、1人1日当たり1.53合(約246g)である。「米は1日に7人家族で2合ほどだった。」(岡山、女77歳)これは1人1日約45g程度の量である。ところが主食をその主なる熱源とするような習慣のわが国情においては、過去の実績と生理的要求量よりみても3合1勺(約500g)は必要であろう<sup>7)</sup>とされていた時代である。しかし、当時の記録<sup>8)</sup>によると昭和19年の都市における米の配給量は265gであり、熱量の絶対的な不足状態みられるなかで、一般庶民はなおそれ以下の熱量不足状態に置かれていた。だが、兵食では1人1日6合(960g)と報告(広島、男84歳)している。これだけで約3420kcal<sup>9)</sup>になる。

都市部生活者の1例を上げると「よもぎをおからに混ぜて、それに米の粉をほんの少量入れて蒸し団子を作ったり、いもは、蔓はぜんまいのように煮て食べ、葉はお浸しにして食べた。配給の乾燥とうもろこし入り外米を炊いたが固くって食べられるものではなかった。玄米のご飯は大御馳走だった。豆腐は週1度、1人半丁ほどだった。油の配給の手伝いをすると何十人もの油の配給をした後はじょうごを置く入れ物に、じょうごから垂れるしずくの油が大分溜る。それを貰って帰るのが嬉しく、よく手伝いに行った。油は貴重品だった。」(広島、女75歳)が当時をよく語っている。飯は白米飯は銀シャリとよばれ最高級でなかなか口に入らず、多くが米にその他のものを混ぜて炊いたカテ飯と呼ばれる飯であった。中に入れたものは麦、雑穀、いも、かぼちゃ、野菜類、野草等である。(表7参照) 麦飯の当時の平均的割合は、米3：麦7である。

子どもの空腹状態を表わす話に「子どもと貨物列車で郷里へ帰る途中、子どもがお腹を空かせて泣いて泣いて泣き止めなかった。向かいの席に座っていた上品な奥さんが見兼ねてカンパンをくれました。カンパンを含ませるとあっという間に泣き止みました。涙がでるほど嬉しかった。」(岡山、女73歳)「子どもが栄養失調にならないように、子どものほうに食べ物を多く回して、自分たちは我慢した。」(広島、女76歳) 当時多くの親はこの気持ちであったろう。

一番困窮していたのが当時外国で生活していた人々である。多くの人々が「口に入るものはなんでも食べた。」「食生活といえるようなものではなかった。」「生きることに一生懸命であまり覚えていない。」と語る。「人間より馬が優先だった。」「馬が食べている空豆を盗んで食べた。」(中国で、

男83歳)「山いも、カエル、ヘビ、ネズミ、トカゲ」等を食べていた。(中国で、男75歳、ボルネオ島で、男75歳)「リンゴ畑からリンゴを盗み1日中リンゴを食べて中毒になり大変だった。以後10余年ほどはリンゴを見るにも嫌だった。」(韓国で、男68歳)「ソ連では大豆粉、こうりゃんを食べていた。1週間じゃがいもだけのときもあった。」(男74歳)「戦争前は現地で高価なものばかり食べていた。いざ兵隊に出ると草ばかり食べていた。」(ビルマで、男80歳)草は生のままでは臭みがあるので、2~3日乾燥させて食べていたそうである。「栄養のことは二の次ぎで空腹をいかに満たすかが問題の日々であった。その結果、栄養不良による結核が多発した。」(韓国で、男79歳)と指摘している。いまのアフリカの栄養失調のこどもの写真をみるとあそこを思い出す、と語った人もいる。語られている多くの内容はおよそ食文化とかけ離れたもので、動物的食欲を満たすだけの日々であったようである。いま、語ってくれた人々はそのなかで生き抜けた人である。動物的食欲も満たせず飢えのなかで死んでいった人も多い。また、このグループの多くが「水と塩」の大切さを語っているのが特徴である。

なお、調味料に困ったことを挙げる人も多く、素材の悪さを調理法でも調理技術でも補えなかった状況が浮かびあがる。調査対象者が語る当時の自家製調味料を表6に示す。

表6 自家製調味料

塩	岩塩や海水から自分で作った。
砂糖	砂糖きびを煮詰めて。柿の渋から。
醤油	醤油の素+塩 みそから。
酢	柿から。
油	鰯から。

表7 昭和19年、20年頃の日常食のパターン

核 になっていたもの

分類	内容	
米飯	・白米	分搗米 玄米
カテ飯	・麦飯	米 0 1 2 3 4 5 : : : : : : 麦 10 2 8 7 6 5 こうりゃん 大豆
	・雑穀飯	米+とうもろこし えんどう あわ、ひえ 豆かす うどん 麦+炒り豆
	・野菜入り飯	米+ 麦 + 野菜 雑穀 + かいもの葉・茎 だいこん 野草など
粥	野菜 ・粥 米+いも 炒り空豆粥 野草	
雑炊	いも 野菜 ・雑炊 米+かぼちゃ いもの葉 麦 野菜 雑穀	
汁	・うどん、そば ・すいとん	
パン	・粉として 小麦粉 大豆粉 どんぐり粉 さつまいも茎の粉 よもぎ粉 とうもろこし粉 ・その他の混ぜもの おから 野菜 野草 油かす ふすま いも	
団子	いも類 ぬか ・小麦+かぼちゃ 野草 さつまいも茎の粉	
芋	・ふかしいも 干しいも	
豆	・炒り豆	
かぼちゃ	・茹かぼちゃ	
その他	・ところてん ・はったい粉	

それぞれの置かれた環境により当時の食生活は多岐であるが、整理してみるとその核になるエネルギー源の取り方はでんぷん質が主体で、表7のように分類できる。この核になるものだけの場合や核+野菜の煮もの、核+魚+野菜の煮もの、核が飯の場合は核+みそ汁+つけものの場合がある。一番多いのが核だけの場合と核+野菜の煮もののパターンである。そして、核の中心となるでんぷん質の質と量が問題で、米が十分使われているときが一番良い食事ということになっている。

## 2 思い出深い食べ物

質問項目としては「戦争」と限らず、「いままでの人生の中で一番思い出深い食べ物とその思い出」について聞いた。結果は、戦争に関係しない思い出の食べ物を答えたのは男性2名、女性3名でしかなかった。それらは、昭和40年以後の思い出である。残りは全部なんらかのかたちで戦争と関係するものであった。

まず、「いままでの人生の中で一番思い出深い食べ物」を表8のように性別、外国経験の有無と食

表8-1 いままででの人生の中で一番思い出深い食べ物 —男性—

群	いままでのほとんどを中国地区で居住した者	戦時中に外国生活のある者
穀類	米、白飯、大豆かす入りご飯、麦飯、いもご飯、干とうもろこし入りご飯、おにぎり、雑炊、餅、お団子、おはぎ、どんつくパン、コッペパン	おにぎり、粟粥、ヒエ、こうりゃん飯・雑炊、素うどん、とうもろこし
芋類	芋(じゃがいも、さつまいも、さといも)干いも、さつまいも粉のパン、大学いも、いも蔓	さつまいも、いも蔓、芋の葉
豆類	大豆の油かす 豆かす	
肉・魚類	にわとり  鯛の刺し身、釣り魚、川魚、するめ	焼き肉、豚の丸焼き、トンカツ、ガチョウの丸茹、川鮒
昆虫	いなご(焼き、佃煮)	カエル、トカゲ、ヘビ
卵		鶏卵
野菜	大根の茹でたもの、 トマト	たまねぎ、かぼちゃ、漬物、 そらまめ(生)
果物・菓子	桃、バナナ、パイナップル  チョコレート、ビスケット、ざらめ	桃、やしの実、マンゴー、 ドリア、パイナップル、バナナ、 パンの木の实 カルピス、あめ玉、
他	中華料理	中華料理

表8-2 いままででの人生の中で一番思い出深い食べ物 —女性—

群	いままでのほとんどを中国地区で居住した者	戦時中に外国生活のある者
穀類	白飯、赤飯、小豆ご飯、もち米、麦飯(いもが主、いも茎入り、丸麦入り)こうりゃん飯、梅干し弁当、大豆ご飯、おにぎり、雑炊、すいとん、餅、かやくご飯、巻き寿司、バラ寿司、カレーライス(肉入り)手打ちそば、うどん、そうめん、いも粥、大根井、きゅうり井、きび餅(さつまいも、南瓜餡入り)ぬか入り玄米パン、コッペパン、どんつくパン、小麦かすの団子、とうきび団子、はったい粉、蒸しパン、雑煮	おはぎ、バラ寿司、年越しそば、素うどん、ひえ入りおにぎり、いもご飯、大豆ご飯、とうもろこし、すいとん
芋類	芋(じゃがいも、さつまいも、さといも) いも蔓	じゃがいも
豆類	大豆の油かす、大豆、	
肉・魚類	肉 ふかの湯引き、刺し身、大鯛、いせえび刺し身、鯛の刺し身、魚卵の煮ごり、鯉のみそ汁、蟹、鯛の塩焼き、さんま丸焼き、小貝、小魚、たこ	
卵	鶏卵	
乳	牛乳	
野菜	ピーマン、まっただけ、えんどうの皮、トマト、かぼちゃ、かぼちゃの蔓、だいこんの葉	三度豆 漬物
果物・菓子	桃、バナナ、梨、パパイヤ、マンゴ、パイナップル、卸しりんごの汁  チューブ入りチョコレート、チョコレート、キャラメル、シュークリーム、かしわ餅、水飴、茶の子(米の粉+さつまいも)、ぜんざい、よもぎ団子、せんべい、あられ、さつまいも飴、とうもろこし砂糖絡め、アイスクャンデー	
他	おせち料理	

品群別に分けて整理した。全体をとおしていえることは、穀類の食品が一番多く、次いで菓子・果物、いも類である。これらは糖質源であり、エネルギー源である。「とにかく甘いものが欲しかった。」(岡山、女75歳)といっているが、空腹になると血糖値が下がり甘いものが欲しくなるのは生

理学的事実である。当時の空腹の状態をよく現していると思う。それと同時に当時珍しかった果物、菓子類（チョコレート、シュークリーム等）が挙がっている。性別では女性の方が料理名で挙げた人が多いのが特徴である。

食べ物と思い出は大別すると「楽しさにつながるもの」と「辛さにつながるもの」の2極に分けられるが、読んでいるとその思い出の食べ物自体は質素で平凡で、なかには人の食べ物と言えないような物もあるのに関わらず「楽しさ、明るさ」につながるものが圧倒的に多い。食べ物をどう受け止めるかはその時代のなかでどう生き抜き、明るさを見つけるかの原点になっていたように思える。改めて食べ物と生との関係を認識した。

これらを思い出別につぎの6項目にわけて整理してみた。

①戦争そのものにつながるもの（表9） ②思い出に人間が介在するもの（表10） ③初めて食べたことが思い出になっているもの（表11） ④特別の日に食べたもの（表12） ⑤思い出に病気が介在するもの（表13） ⑥恥ずかしい思い出が関係するもの（表14）

これらを項目別に考察する。

#### ①戦争そのものにつながるもの

この分類に属する思い出の場面は楽しいものは少ないのが特徴である。端ばしに屈辱的な、そしてほろ苦い思いがうかがえる。「豚の丸焼き」の人は塩をつけて食べたことが豚肉と同等の価値になっている。（当時満州、男76歳）いまの日本では高級品の部に属するマンゴー、ドリアン、パイナップル、パンの木の実はこの人（当時中部太平洋の島、男70歳）にとっては、嫌な食べ物になっている。しかし、パンの木の実は大変よかった、と回想している。ボルネオ島でヘビ、トカゲ、カエルを食べていたときのことは一生忘れられない戦争との思い出である。（男74歳）引き揚げ船に関する食べ物も幾つか挙げられた。満州から引き揚げる船のなかで食べた雑炊は、生きたという思いで食べ忘れられないという。（男65歳）でもそれはいまのように美味しいものではなく、特にこうりゃんの雑炊は渋味があり、空腹であっても美味しいとは思わなかったそうである。引き揚げてきて最初に食べた「素うどん」の美味しさを語っているが、高かったことも忘れられないことだそう。最近の新聞紙上で「10年程前ベオグラードのレストランでスパゲティを代用して作られたと思われる月見うどんを食べて、商社マンの執念をみる思いがした。」という記事<sup>10</sup>を読み、一つの食品の持つ重みを思った。

また、勤労動員や女子挺身隊で食べた雑炊、すいとん、こうりゃん飯、大豆ご飯が挙げられている。



表9 戦争そのものにつながるもの

○男性の場合

食 べ 物	場 面
焼 肉 わかめ やしの実、ドリア、バナナ 鶏、豚、ガチョウ カエル、トカゲ、ヘビ 豚の丸焼き こうりゃん飯 こうりゃん雑炊 素うどん かぼちゃ ヒ エ 大豆かす	戦場で食べた焼肉。たんぱく質など食べられなかった頃のためわかめいっぱいのみそ汁を毎朝海軍で食べていた。 戦争の思い出そのもの。他にマンゴー、パイナップル空家等から盗って食べた。 ボルネオで食べた。 塩をつけて食べた。(戦地) 外米7：こうりゃん3 引き揚げ船の中で食べた。 引き揚げてきたとき最初に食べた。おいしかった。 家畜の残りものを食べた。 米を強制的に出さされたとき食べたもの。 かすしか入手できなかった。
その他	麦飯 すいとん 雑炊 いもご飯 いも蔓 いもの葉 粟がゆ等 戦争中、終戦直後のなにも無いとき食べたもの。

○女性の場合

食 べ 物	場 面
じゃがいも もち米 雑炊、すいとん、大豆飯、 こうりゃん飯 うどん さつまいも かぼちゃやいもの蔓、豆かす 梅干し弁当	買い出しの思い出。 沈んだ船から取り出した。塩辛かった。 勤労働員でかりだされていたときの食べ物。 挺身隊で食べた。 うどんばかり配給で嫌いになった。 3食とも嫌になったが、食べられるだけでも幸せだった。 実は戦地へ。 それでも持っていったときは嬉しかった。
その他	麦ご飯 かぶちゃ雑炊 さつまいも茎の団子 いもの粉団子 とうきび粉の団子 ドンツクパン ぬか入りパン 大根井 きゅうり井 はったい粉等

②思い出に人間が介在するもの

介在する人間は母親10人、父親1人、両親3人、本人3人、子ども1人、兄弟2人、祖父母6人、伴侶2人、家族全体1人、その他6人で母親が圧倒的に多い。

このなかで、悲しみにつながる思い出の食べ物は6種で、親しい人の死とつながっているものが4種である。「バナナ」はいまの若い人たちには信じられない話しであろう。また「三度豆」の人は(当時満州、女70歳)悲しみのなかに「新鮮で美味しかった」と述べている。新婚と新鮮な緑の

表10 思い出に人間が介在するもの

## ○男性の場合

食 べ 物	関 係	場 面
※ おにぎり 魚 ※ バナナ	母 妻 長男	あったかさ。 自分が釣った魚を妻（故人）が料理していたから。 結核にかかり医師から見離されていたとき、高価なバナナを買ってやったが、もう受け付けなかった。
干しいも 茹じゃがいも 野いちご	親戚 他人 友人	命からがら戦災から逃げていったところで貰った。 民家のおばさんが塩をふりかけたものをくれた（戦災後） おやつが無いころ、近所の子どもたちと採った。

## ○女性の場合

※ いも蔓 えんどうの皮 豆腐 うどん	本人 本人 本人 姉	買い出しにいく途中空襲にあった。そのころの食べ物。 苦勞して家で海水を使って作った。 手打ちうどんを妹や弟に作って食べさせた。 姉の婚家先で3杯食べさせてもらって嬉しかった。
さつま芋餡 水 餡 とうもろこしのおこし 桃	母 母 母 母	よく作ってくれたおやつ。 } 作った後の鍋に炒り豆等を入 小米で作ってくれた。 } れてお菓子を作ってくれた 少しの砂糖を使ってお菓子を作ってくれた。 学校から帰ると井戸水で冷やしてあった。 美味しさが忘れない。なにも無い時代だった。
そうめんの酢みそかけ おはぎ お寿司	母 母 母	なにも無い時代、里帰りしたときの母の味。 よく作ってくれた。さつまいも餡、かぼちゃ餡もある。 バラ寿司が一番。
※ 大豆ご飯 ※ 丸麦ご飯ととうもろこし ぜんざい い も 桃とバナナ	母 母 父 両親 両親 恋人？	帰国船の中で大豆ご飯ばかりで母が下痢をして困った。 母が買い出しに行く途中、乗っていた船が沈没して死亡。 そのころ食べていたもの。 父が少し手に入った砂糖で作ってくれた。 両親がわら細工をしていもと交換して食べさせてくれた。 祖母、両親から疫病の元と食べることを禁じられていたが 19歳のときある人から大丈夫と云われて初めて食べた。
※ 三度豆（生） しば餅 手打ちソバ 山兔の好き焼 鯉の味噌汁 まったけ 魚卵煮ごごり 茶の子 たこ、蟹等 よもぎ団子 おせち料理 巻き寿司 手打ちソバ	夫 祖母 祖母 祖父 祖父 祖父 祖父 実家 兄 家族 親戚 近所 近所	短い結婚生活の新婚のとき食べた。新鮮でおいしかった。 一緒に作った楽しさ、おいしさ。 短く太いけどおいしかった。ご飯の代わりだったが。 仕掛けた罠にかかった。肉はめったに食べられなかった。 池で捕まえてきて食べさせてくれた。 警察官だった祖父が巡回の度に一杯貰ってきたのを食べた 祖父が釣ってきた魚を料理して食べさせてくれた。 米の粉とさつまいもで作ってくれた。よく食べた。 食糧難のころ、よく釣ってきておかずにしてくれた。 みんなで作って楽しかった。 めったに集まらない親戚の人と一緒に食べたこと。 のりを近所の人に貰って作って食べた。 韓国で大晦日に手作りして

※は特に悲しみとつながる思い出

三度豆の組み合わせに、その人の悲しみの深さとともに夫亡きその後の生活を支えた三度豆の役割が感じられる。残りは何となくほのぼのとする人間愛につながっている。

具体的な食べ物名というより食べ方を挙げた人がある。(広島、男76歳) 栄養失調で引き揚げてきたとき、「練乳」とか「おかゆ」を少しづつ食べた自分は元気になったが、栄養失調だからと家の人がいろいろなものを沢山食べさせてもらった人は死んでしまった、という事例である。教えられる話である。

③初めて食べたことが思い出になっているもの

ここにあげた食品はカタカナ名のものが多い。チョコレートは30歳のとき初めて食べた人は当日日立造船に勤めていた現在89歳の男性であるから、いまから60年前の話である。いせえびの刺身以外はいまでは全て平凡な食べ物である。新しい食べ物の移動が食文化に与える影響がここに多少うかがえる。

表11 初めて食べたことが思い出になっているもの

○男性の場合

食 べ 物	場 面
コッペパン	はじめて口にしたときはおいしかった。
トマト	アメリカナスビと呼ばれていた。楽しみにして食べたがくさかった。
パイナップル	旅先で初めて食べた。
チョコレート	勤め先の日立造船で30歳のとき初めて貰った。
中国料理	旅先で初めて食べた。

○女性の場合

蒸しパン(餡入り)	台湾帰りのおばさんが作って食べさせてくれた。
コッペパン	戦時中、小麦をパン屋さんに持っていき焼いてもらった。 あまりおいしいとは思はなかった。
雑炊、すいとん	初めて自分で作った。
刺し身	食糧公団の宴会で初めて食べた。
いせえびの刺し身	終戦後に初めて食べた。
麻婆豆腐	豆腐の食べ方にこんなものがあるかと驚いた。
トマト	真っ赤な隣の家のトマトをやっと食べれたとき。
ピーマン	それまでは外国の食べ物だった。
梨	婚家先で初めて食べた。
パパイヤ・マンゴ	外国航路の祖父のおみやげ。
シュークリーム	”
キャラメル	都会から帰ったおばのおみやげ。
チューブ入りチョコ	買える人は少なかった。

## ④特別の日に食べたもの

ここに挙がったのはいわゆるハレの日の食べ物が中心である。しかし、なかにはお供え米より実質大きいおにぎりに換えてもらったもの（鳥取、男83歳）、肉入りのカレーライスが特別の日しか食べられなかった（香川、女67歳）、せんべい（島根、女63歳）やあめ（岡山、女76歳）が特別の日の食べ物であったとは、いまの時代では想像つかない事実である。

表12 特別の日の食べ物が思い出になっているもの

## ○男性の場合

食 べ 物	場 面
お餅、お団子	正月とかお祭りのとき。
おはぎ	農家の手伝いの後食べさせてもらう。
鯛の刺し身	お祭りなどのとき。田植えを手伝った後食べさせてもらう
おにぎり	毎月20日神様を拜む日。神様に供えたおにぎりを少しのお供え米と交換してもらえるのが楽しみだった。

## ○女性の場合

米の飯	ハレの日でないと食べられなかった。
おはぎ、赤飯、お餅	お祭りなどハレの日
バラ寿司、巻き寿司	
カレーライス	肉入りのカレーライスは年1度くらい。兄弟で争った。
七夕団子	七夕の日
よもぎ団子	お彼岸のころ。お雛さま。
せんべい	遠足
あめ	月1回のお参りのとき。
バナナ、まんじゅう	手に入りにくくめったに食べられなかった。
かしわもち	田植えが終わったとき。
ふかの湯引き	進水式で食べた。

## ⑤思い出に病気が介在するもの

語られた9例の食べ物は、鯛の刺し身以外はいまでは日常食になっているものばかりである。当時は卵、バナナ、牛乳は貴重品で病人の食べ物であったことがよく表れている。あめ玉の思い出を語ったのは80歳の男性である。その頃なかなか口にすることができなかったそうである。中国料理で肋膜炎が治ったのは当時朝鮮に住んだ男性（68歳）である。中国料理の油とたんぱく質と野菜の組み合わせは、当時の日本の食事にはないものを持っていた。チョコレートと虫歯を語ったのは79歳（岡山）の女性である。妊娠に関係するのは、表のピーマンの他に「乳を飲ませたら腹がカラッポになって辛かった。」（岡山、女75歳）「赤ん坊のため4時間かけて歩いて牛乳を貰いに行っていた。」こんな母もいる。（岡山、女71歳）

表13 思い出に病気が介在するもの

○男性の場合

食 べ 物	場 面
卵・バナナ	病気の時しか食べられなかった。
あめ玉	麻疹にかかったとき、祖母がてっぽう玉というあめ玉をくれ、一言「元気になられー」といつてくれた。
中国料理	外地で中国料理を食べたら肋膜炎が治った。

○女性の場合

牛 乳	病気にならないと飲めなかった。
鯛の刺し身	病気の時食べた。
ピーマン	栄養があると教えられ、妊娠中胎児のため無理して食べた
バナナ・パイナップル	病気になると食べることができた。
チョコレート	嬉しくって食べすぎて、虫歯が痛み眠れなかった。
卸しりんごの汁	病院入院中に飲んだ。

⑥ 恥ずかしい思い出が関係するもの

こういう思い出は著者にもある。消化不良からガスばかり溜ってお腹が膨れていた。おならをしたこともあるが、やはり当時の空腹感とあいまって現在まで忘れがたい思い出の食べ物となっているのであろう。

表14 恥ずかしい思い出が関係するもの

○女性の場合

食 べ 物	場 面
じゃがいも } とうもろこし }	小学生のとき朝礼でおなら我慢できず恥ずかしい思いをした。
ひえ入りおにぎり	温かいうちがおいしいので登校途中に食べてしまい、昼にお腹がすいて困った。

### Ⅲ ま と め

第二次世界大戦末期、食糧事情が極度に悪化した状況下での一般市民の食生活がどのようなものであったか、そしてその時代を潜り抜けた人たちがもつ食べ物と思い出について、中国・四国地区在住高齢者の聞き取りで集めた資料をまとめた。その結果は以下のような知見を得た。

- 1) 調査対象者の大半(40.6%)が農業と関わっていたにも拘らず、飢え、空腹を訴えている。
- 2) 米の不足が著しく、飯といえばカテ飯の形であったので、米のご飯に対する思いが強い。

- 3) 米と麦の配合割合は3：7が多い。
- 4) 当時外国に居住していた人たちの多くは、口に入るものはなんでも食べ、食生活といえるものではなく、生きることに一生懸命でなにを食べたかあまり覚えていないといっている。食文化とおよそかけ離れたものであったようである。
- 5) 4) のグループの人々は水と塩の不足を訴えている。
- 6) 調味料不足を訴える人も多く、素材の悪さを調理法でも調理技術でも補えなかった状況が浮かび上がる。
- 7) 当時の食事をパターン化すると、米・雑穀・いも類のでんぷん質からのエネルギーを中心とする核になるものがある。核だけの食事がほとんどであったようである。
- 8) 思い出深い食べ物は戦争に関係する食べ物がほとんどであった。食品群でみると穀類が一番多く、ついで菓子・果物、いも群であった。
- 9) 楽しい、明るさにつながる食べ物が多い。
- 10) 食べ物につながる思い出は戦争・人間・初体験・特別の日・病気・羞恥の6つに分けられる。人間が介在する思い出では介在する人間は母親が圧倒的に多い。

以上、いまの日本の現状からみればとうてい想像つかない食生活を一般市民はしいられていたのである。そのなかで、人々は懸命の努力をしている。食べ物の思い出がプラスイメージとつながっているものが多いのもその努力の1つと思える。そして、人間が介在する思い出の食べ物が一番多いことは、食教育の上で貴重な資料となる。また、この頃外国で生活していた人が以外に多いのに驚いた。

この、食の大変な混乱時代もいまからみれば「しいて文化というような問題でいえば、この時期の雑食生活のために、今まで米食を中心とした食事の型が崩れ、このあとにくるパンや麺類をふくめた多様な食事形式を結果において準備することになったことだろう。」<sup>1)</sup>ということになる。まとめを行なっているとき、冷害による米の不作からさまざまな社会問題が起こり、戦後から半世紀をへて米を買うための行列や外米の問題に再び直面したことは、改めて食の知恵の必要性を考えさせられ、極度の食料難を耐えた時代の記録の必要性を思った。

稿を終えるにあたり、厳しいご助言をいただきました故大塚慎一郎教授の霊にお礼申し上げますとともに、調査にご協力くださった人々、まとめを手伝ってくれた食物栄養専攻の学生たちに謝意を表する。

## 参 考 文 献

- 1) Ken Plummer (原田, 川合, 下田監訳) : 生活記録の社会学, 光生館 (1991)

- 2) 福武 直, 松原治郎: 社会調査法, 有斐閣 (昭和54)
- 3) 安田三郎: 社会調査ハンドブック, 有斐閣 (昭和54)
- 4) 浦城晋一: 〈食〉の昭和史, p 120, 日本経済評論社 (1986)
- 5) 同上 p 120
- 6) 同上, p 122
- 7) 大森憲太: 国民栄養概論, 雄山閣 (昭和25)
- 8) 社会科事典 5 [食糧問題の項], 平凡社, (昭和27)
- 9) 四訂食品標準成分表: 科学技術庁資源調査会
- 10) 日本経済新聞: 春秋, 1994, 3, 37
- 11) 南 博+社会心理研究所編: 日本人の生活文化事典 p 76 勁草社 (1991)